
キモ男 カンバ〜〜ック

タゴサク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キモ男 カンバ〜ック

【Nコード】

N8151Z

【作者名】

タゴサク

【あらすじ】

前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。

キモ男さん、再び。（前書き）

前作のゼロのキモ男さんのカンバックモノです。

煮え切らなかったハーレムルートとか、その他を改めて見ます。
ヤケでルイズも面倒見ますよ。エエ。

ツルペタ、巨乳、ロリに年増バッチコイの変態SS目指します。

キモ男さん、再び。

。。。。。

オレの名前を知ってるかい？

ヤマダタロウと言っただぜ。

人生二回目の引き籠もり、誹謗や中傷にや負けたけど。。。

やっぱりルイズに召還だああああ。。。

タロウです。

皆様、オイラの事を覚えてるか？

一回人生を完全に終わったのに、またタロウしています。テヘっ

さて、現状を説明しますと。。。

広い草原があります。

私は先程まで自分の部屋に引き籠もってネットしてました。

手元にはノーパソもあります。

お気に入りのフュギアさんも大切に懐に入れてありますよ。

ええ、ゼロ魔20巻のあのテファたんです。

で、目の前にいらっしやるのが。。。

ツルペタツンデレ爆発桃髪さんです。

そう、ルイズですよ。

はあ。。。またですか。。。

ネ申様、居るのでしょうか？

また使い魔ですか？

(タロウよ、カンが良いのお。)

もう慣れました・・・。

今回は死ぬまで引き籠もり続けるつもりだったのに。
どうして引き籠もらせてくれなかったのですか？

（イヤ・・・ヒマになったから・・・では無いぞ。
設定の都合とだけ言っておくわい。）

ナニやらゲフンゲフンと言う声もしますが、作者さんよ。
アンタ、ゼロ魔は卒業するって言わなかった？

おかげでオラは安心して引き籠もりが出きると思ってたのに。

しかし・・・どうするべ・・・。

ルイズの性格は記憶していますよ。

ですが、また面倒見るかと思うとね・・・。
気持ちが萎えてしまいます。

ネ申様、今回のスペシャルプレゼントはどうすんの？

正直、チートよりも現代化学が使える方がオラは嬉しいのですが。

（タロウよ、この脆弱なハルケギニアで現代化学が通用するか？
ムリだろ・・・。

掘って今回のスペシャルプレゼントは・・・。）

ドキドキドキドキ

（前回同様、全系統魔法のチートアード魔力無制限としまあす。
コレで頑張れるでしょ？別に嫌いなヤツは相手しなくてもこの世界
では生きて逝けるヨン。
頑張ってね。タロウ。）

おお。最初から飛ばしてくれますな。ネ申様。

そう言えば転生してからは、何故か前世の現世同様。

全くモテないクンでしたが。

もしかして現世に未練が無い様に仕組まれてた・・・のですか？

ネ申様・・・。

（ヒューヒュー、ワシは何も知らないモンね。詳しくは作者にでも聞いてチヨ）

ヤツが教える訳が無いでしょ。

はあ、じゃオラはこの世界で・・・。

ハーレムを目指します。

食べる女は全て食ってやるうう。

（おお、遂にタロウからハーレム宣言が。

ガンガレよ。そんだけのチートがあればハーレム達成も難しくは無いでしょ。

んじゃワシは用が終わったので消えるヨン

ネットは前作同様神ネットと契約しといたからね。

好きに使ってチヨ

ばいばいき　　ん）

ネ申様は何時ものバイキンバイバイを言うと霞の如く消えてしもた・・・。

そろそろ桃髪が爆発する頃か・・・。

「チヨツと・・・アンタ・・・。

いい加減にコツチの話を聞きなさいよ・・・。」

「そう言う貴様は誰だ。余をこの様なド田舎に拉致しおつて。」

オレはそう言うのと、ツルツパゲ先生の頭に即効魔法アデランスを唱えた。

瞬間、彼の寂しい頭はボン　と言う音と共にフサフサの髪の毛が。

「お、おおおお。私の髪が。」

貴方はメイジですか？いいえ、きっと神様なのでしょう。

長年の私の苦悩が貴方の魔法で・・・。」

「フム・・・。何やら貴殿から頭が寂しい寂しいオーラが出てたので
つい余の魔法で

フサフサにしてもたが。

不味い事でもしたかな？」

「いいえええ。ありがたい事です。」

あつ、私はこの魔法学院の火の魔法教師をしています、ジャン・コ
ルベールと申します。

もし宜しければお名前をお伺いしたいのですが・・・。」

「それは構わないが、まずこの状況を説明して貰おうか。」

余はタロウ・ヤマダ。

この世界とは違う世界の魔法使いの教師をしておる。」

「誠ですか？でも私では出来なかった髪の毛の増殖魔法を見た感じでは
信じるしかありませんね。」

いえ、世界が信じなくても私は貴方を信じます。

貴方こそが私の求めてた究極のメイジ、魔法使いですよ。

タロウ・ヤマダ様。」

何かコルベールさん、随分とフレンドリーですね。

狙った訳ではありませんが、あの方は敵にいたく無いのですよ。この世界には当然おマチ姉さん、居ますよね。

彼女こそが自分の人生でも最高の姉さんでした。

彼女と過ごした生涯は本当に幸せでした。

この世界のマチルダも必ず・・・キリッ

幸せにしますよ。エエ。

さて、ルイズの仕込みでもかかりますか。

アレでも一応はこの世界のメインキャラです。

潰すとなるとアンチになりますから、適当に幸せにしましょ。

でも・・・この外見では・・・。

ピカッと閃いたのは、もしかしたらこの世界はアノ世界の続きでは無いかな？

と言う事です。

試しにあの方を呼んで見ましょう。

「アクア姉さん」

（呼んだか？タロウよ。）

やはりこの世界はアノ世界の続きでした。

呼んだら来るもんな。

「久しぶりです。さん。（真名なので伏字です。）

久しぶりにこの世界に来たのですが、体系がアレなのですよ。

何とかかつての体系に戻して頂けません？」

（造作も無い事よ。タロウ。）

フム……。コレで良いか？)

見ると醜かったお腹もスリム。
記憶の中に残ってる一番ベスト時代の私の体系となってたのです。
やはりアクア様は私の最高の女神様です。
感謝しますよん

(……。あまり褒めるな。タロウ。
照れるでは無いか……。)

「おおお、様がデレた。
今回も世話になります。」

(任せるのだ。タロウよ。
お前が帰った事は他の精霊にも告げておこう。
フフフフ。
楽しみにしておけ……。)

水の精霊、アクア様は何やら不気味な事を仰ってましたが……。
ま、良いでしょ。
おかげでメタボから開放され、身体の軽い事

ん??????

皆様、どうしたのですか？
金魚みたいに口をパクパクさせて。。

「タ、タ、タ、タ、タ、タロウ様、貴方様は、水の精霊様とお知り
合いましたか？」

「ン??ああ、あの方は以前からのお友達ですよ。それがどうかしましたか?」

縦ロール髪のおぜう様は何やら言いたそうですな。あれは……。

モンモンだ、確かに。」

「あ、あのおお。タロウ様で宜しいでしょうか?

私はモンモランシー・マルガリータ・ラ・フェール・ド・モンモランシーと申します。

長いのでモンモランシーと呼んで頂けると幸いです。所で……。

先程、タロウ・ヤマダ様がお呼びになられた方は、この国で水の精霊様と呼ばれる存在ですよね?」

「多分、そうだと思うぞ。余は昔からの知り合いだけだな。」

「精霊様とお知り合いですか……。

あのおお、精霊様にお問い合わせなのでしょう?」

「そりゃ頼めば出るぞ。だが、それがお前に関係あるか?」

「い、いいえ……。私の実家は水の精霊様の盟約の一員として、トリスティンで働いていました。

ですが、私の父があの方に粗相を働いてしまって、盟約の一員から外されてしまったのです。」

「ふーん、可愛そうだね。」

「ですので、タロウ様があの方に取り成して頂けないか……と。」

「だが断る。」

余はこの国に拉致されたばかり。

自分の国に帰る術も無くした今の状態で、他人に構う余裕は無し。

ああ、忘れてたな。

その桃髪。

この責任はどう取る気だ？」

いきなり話を振られたルイズはパニックってしまった。

コルベール先生の頭に毛が生えたり、メタボのアレがいきなりスリムになったり、

水の精霊が出現したりと頭がオーバーヒートしてたのである。

「わ、私は・・・」

「タロウ・ヤマダ様、お待ちください。」

私がこの場の責任者です。どうか怒りを納めて頂けませんか？」

ルイズに話をさせると、場が崩壊すると判断したコルベールが話しに割って入る。

中々良い判断ですね。

コルベールさん。

「フム・・・。確かに「お子様」に責任取れと言ってもムリだな。良からう。コルベールさん。貴方と談判しましょう。」

「チョッ、お子様って誰の事よ。」

「そこに居るのは自分のケツも拭えない子供だろ？」

「乳ナシ娘さん」

「フンガー、乳なんて関係無いっしょ。」

「まあ素材は悪く無いのに、そんだけ乳が無ければ女として見込みゼロですな

自分に任せれば乳くらいは成長させれますけど」

オレはそう言うときハラマジークと叫び、モンモンに対し乳促進魔法を発射。

いや、ネ申様。

今回のタロウは一味違いますね。

イメージ通りにモンモンのツルペタが見事な形の乳に成長

「わ、私の胸が・・・。

ありがとうございます。タロウ・ヤマダ様。」

「アラ？もう一人のツルペタに発射するつもりが間違えてしもた。返してくれる？」

「イヤです。長年の悩みが解決したのですわ。

この胸は私だけのモノ。嗚呼、嬉しい」

モンモンは自分の成長した胸を大切に抱きかかえ、悶絶してた。

「チョツ、洪水のモンモン。その胸は私のモノよ。私に渡しなさい。」

「絶対にイヤ・・・。コルベール先生、胸がとてもキツイので早退しますね」

「あ、ああ。分りました。モンモランシー嬢・・・」

しかしタロウ様の魔法は凄いですね。

ハルケギニアの魔法とはケタが違います。」

「この世界の魔法を見た事はないが、この程度なら余の生徒なら誰でも出来たぞ。

（大嘘）。」

「素晴らしいですね。私も貴方に師事したいと思う位です。」

「若くないとムリですよ。それに私の勤めてた学校の生徒は、全員が魔力満点で

無いと入学試験すら受けられません。

見た所、この学院の生徒は私の受け持ってた生徒と比較するのもバカバカしてレベルの

生徒ばかりです。先生も大変ですね・・・」

実際にトリステイン魔法学院は幼児に魔法を教えるのと同じレベル。

ロクな教育を受けていないガキばかり。

だから滅びそうになるのよ。

多分・・・。

その後、召還会場でグダグタしてても仕方ないので、変態校長オスマンに交渉に行く事になりました。

コルベールさんは頭がフサフサでニコニコしておられます。

今、この瞬間にメンヌベルに殺されても笑いながら逝けそうですね。ツルペタツンデレ桃髪は、ワテ等に付いて来ながらも、何で私の胸

を・・・。

とブツブツ呟いています。

アーアー、聞こえません。

またオスマンと遭うのか・・・。

今度の人生はもう好きに生きる。
行き当たりバッタリで生きます。

キモ男さん、再び。（後書き）

本作は原作とは殆ど話の筋が変わります。

一応、原作に従い話を進めますが、キャラは別物となります。

原作崩壊となりますので、原作萌えの方は見ない事をお勧めします。

**変態校長とキモ男さん
(前書き)**

オスマンとの対決です。

変態校長とキモ男さん

「ヒマじゃのおお。」

「オールド・オスマン。」

ヒマだからと言って私のお尻を撫でるのは止めて貰えませんか？」

「いい天気じゃのおお。」

「ボケたフリしてもダメです。
その手をどけてください。」

「真実はどこにあるのかのおお。」

「少なくとも私のスカートの中にはありません。
机の下にネズミを忍ばせるのは止めて下さい。」

「モートソグニル。気を許せる友達はお前だけじゃ。
オスマンはネズミにナッツを与え齧らせている。」

「そうかそうか。もっと欲しいか。ほれやるぞ。
所で今日の下着はナニ色じゃった？」

チュウチュウとネズミが何やら言ってる。

「そうか、白か。たまにはショッキングピンクとか黒も良いがお。
今度秘書経費で下着を……。」

オスマンは最後まで言えずにロングビルからアップパーカットを食ら

つてた。

「ナ、ナイスパンチじゃ。ぐふっ・・・。」

「オールド・オスマン変態校長、今度やったら・・・。
コレでは済ませませんわ・・・。」

ロングビルは両手を組み合わせバキバキと指を鳴らせてる。
オスマンは首をカクカクと震わせ、イエス・マムと答えるのみだった・・・。

タロウです。

いよいよやって参りました。

この世界最強の変態。

オールド・オスマンの居る校長室です。ハイ。

でも避けてはいけません。

ヤツを避けるとマチルダ姉さんと知り合う事が出来なくなります。
今回も土くれのフーケは出しませんよ。エエ。

テファのためにもね。

「オスマン校長、コルベールです。
召還の儀式でトラブルが出ましたので、ご相談に上がりました。」

「コルベール君か？
良からう、入りたまえ。」

オスマンの許可が出たので、コルベール、ルイズ、そしてオラが校長室に入る。
中にはロングビルさんこと、マチルダさん、オスマンが居た。

「その方はどなたかな？」

「オスマン校長、彼は異国の凄いメイジです。
見てください。私のこの頭を・・・。」

オスマンは目を見開いて驚いてた。
あまり男の顔は見ないので、気づかなかったが、ピカピカ頭がフサフサとなってるのだ。
そりゃ驚くってモンです。

「ツルベール君がフサフサ君になつとる。
どうしたのだ？その頭は。
悪いモノでも拾って食べたか？」

「ココにいらっしゃるタロウ・ヤマダ様の魔法でこうなったのです。
嗚呼、若き日の私の頭が蘇るとは・・・。」

オスマンはコルベールの頭を触ったり毛を抜いたりして確かめてた。

「痛いではありませんか。校長。」

「スマンスマン。ホンモノか確かめて見たくてのお。
だが毛根もある。まさにホンモノだ。」

「この方ですが、ルイズ嬢の召還の儀式でこのハルケギニアに呼び寄せられたそうです。

異国の魔法学院で教鞭を取られてたそうですよ。
素晴らしいメイジです。」

「フム……。確かにコルベール君の頭が自毛になってる。
昨日までは光輝く寂しい頭だったのだがお。

おお、挨拶が遅れてたが私がこのトリスティン魔法学院の校長、
オールド・オスマンじゃ。貴殿の名を宜しければ教えて頂けぬか？」

「始めまして。

二ホンと言う国で教師をしていましたタロウ・ヤマダと言います。
趣味は魔法と……。色々です。」

「色々と言うのも気がかりだが……。
して、貴殿はどうしたいのじゃ？」

「まず帰る方法が分るまでの生活保障をお願いします。
使い魔にはさすがになれませんが、代わりにルイズ嬢には使い魔の
代わりとなる

異界の動物を進呈致します。」

「へ???私に使い魔となる動物をくれるの?」

「人間の使い魔よりは勝手が良いでしょ？ルイズ嬢。」

「そりゃそうだけど。でもドコに居るのよ。」

「後で召還したるで待て。小童。」

して・・。そこにいらつしやる美しいおぜう様。

貴女様から何か悲しい波動を感じるのですが。

もしかしてイヤな事を無理強いされていませんか？」

「へ???私ですか？」

「ハイ。メガネをかけた美しい年頃のおぜう様は貴女だけです。この場では。」

「ま、嬉しい事を。でもどうして私から悲しい波動を感じるのですか？」

「私の世界には「セクハラ」と言う女性に痴漢行為をする男性が後を絶たないのです。」

女性をモノ扱いして、勝手な事ばかり無理強いして逮捕される連中も多々。」

そう言う被害に遭われてる女性と同じ悲しみが貴女から感じられるのです。」

「ま、お優しい事を。そうですね・・・。」

ロングビルは黙ってオスマンの方をジロリと睨みつけている。

「ナルホド・・・。恐らく秘書と言う弱い立場の貴女にヒビジイが無理やりセクハラを」

しているんですね。分りました。
貴女の苦しみをヒヒジジイにも味わせてあげましょう。少しお耳を
拝借して宜しいですか？」

ロングビルはハイと言うとタロウの口元に耳を傾ける。
オスマンは何やら怪しい雲行きとなり汗ダラダラ・・・

「フフフフ。面白い事ですわね。
分りました。タロウ・ヤマダ様、お任せします。」

「ラジャです。では・・・。
オールド・オスマン。立ていい。」

気合を入れた声を上げると、オスマンは自分の意思とは別に直立不動の姿勢を取らされた。

「な、ナニが始まるのじゃ。」

「楽しい事ですよ。」

オレは即席魔法、セクハラチェンジを唱える・・・。
すると・・・。

オスマンの立ってた位置には十六位の見目麗しい女性が。
そしてロングビルさんの立ってた位置には逞しい男性が。

「ロングビルさん、彼女に女性のイヤな事を散々味わせてください。
オスマンコちゃん、頑張つて耐えてね。」

「わ、ワシがおんにやの子に・・・わーい。触り放題だ。い。」

オスマンは喜んでるが、それからが地獄の始まりだ。

男性にあるべきイチモツも消えているのに自分にセクハラしても痛いだけ。

そしてキモチワルイのだ。

ロングビル氏はオスマンコちゃんに近づくと・・・。

「オスマンコちゃん、カワイいわね。ゲヘゲヘゲヘ・・・。」

と、鼻息も荒く近づき、触るわ、叩くわ、揉むわとムチャクチャしまくり。

オスマンコも最初は喜んでたが、段々恐怖に変わり・・・。

「もうイヤ　　元に戻してえええ。。。」

「ダ・メ・です。女性のセクハラの苦しみはこの程度ではありませんせんわ。

私、イヤ今はボクの苦しみを思い知れええ。」

ロングビル氏は更にオスマンコに触る触る。

仕舞いには彼女は失禁してしまい悶絶して気絶。

「ふう・・・この程度で良いわね。

タロウ様、ありがとうございます。そろそろ元に戻して頂けます？」

「ラジヤです。」

オレはセクハラチェンジを解いて、オスマンとロングビルさんを元に戻す。

オスマンは下半身ズブ濡れで気絶してるが、汚いので始末だけはしておいた。

そして活を入れ、オスマンを正気にすると・・・。

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ・・・。」

と正座して土下座を始めた。

余話怖かったのだろう。

世の女性はこんな恐怖を毎日の様に味わってるのだ。

痴漢に憧れてる男性諸君。

痴漢で感じる女性なんて皆無に近いんだからね。

お近づきになりたいなら、キチンと口説いてください。

フラれたら諦めるのですよ

さて・・・。

オスマンに対するオシオキは終わったので交渉再開です。

「オスマン殿、自分は今、見せたみたいな魔法のほかに色々楽しい事が出来ます。

ええ、色々だね。」

オスマンは恐怖のため、まだガクブルしてる。

フフフ・・・。

いくら長生きしようが、おんにゃの子になる経験だけは皆無だったろう。

ザマーですよ。

ロングビルさんも元の女性の形態に戻り、勝ち誇った顔をしております。

「わ、分りました。タロウ・ヤマダ殿。

もう二度とセクハラはしません。

女性の嫌がる事は絶対にしません。

お許しを・・・」

「オスマン殿、女性に対するセクハラの恐怖、良く分ったでしょ。二度としてはいけません。今度したら・・・。幼女にしてスラム街に放置しまっせ。」

「もう懲りました。ワシは男のジジイで結構です。お触りしたい時は、お金を払ってンナ店に行きます。」

「宜しい。じゃ、交渉再開と逝きましょうか」

そっからはコツチのペースでした。始めっから相手の度肝を抜いたので、もう言いなり。仕事はココの学院の教師に赴任。

一応、全系統が使えるので、手抜き教師を叩き潰して後釜に座る事にしました。

寢床は自分で建てるので、学院内に空き地を貰います。食事は学院の教師と共に頂く予定です。

ルイズ嬢の使い魔は明日、校長室で召還する事にしました。ナニを召還したろうかな・・・。

ま、疲れたので今宵は食事をメイドさんに運んで貰い、貴賓室に休ませて貰いました。
チャンチャン

変態校長とキモ男さん（後書き）

オスマンコちゃんとロングビル氏の絡み、いかがでしたしょ。

痴漢はいかんですよ。皆様。

どうしても女性に近づきたい非リア充の皆様は金を払っていかがわしいお店へ。

マチルダさんとキモ男さん（前書き）

マチルダを引き込みます。

マチルダさんとキモ男さん

タロウです。

オスマンとの交渉を終えたオラはロングビルさんの案内で、貴賓室へと向かっています。

「タロウ様、今日はとても楽しい体験をさせて頂きました。本当に感謝しております。」

「ロングビルさん、世の女性の大半はンナヒヒジイの手籠めにされてるのですよね。」

女性は好きな男性のみに身体と心を預けるべきなのに、立場を利用し、

イヤな事をするヤツは後を絶ちません。

もし困った事があれば相談して下さい。

ヤローの相談は、あまり聞きたくありませんが、麗しい女性の相談は最優先でお聞きます。」

「ま、本当にダンディなのです。タロウ様。

分かりました。また何かありましたら是非、ご相談させてください。」

その時、オレは周囲に誰も居ないのを感知してから彼女にボソリと呟いた。

「マチルダさん、土くれのフーケだけは絶対に止めてください。妹が悲しむ事になりますよ・・・。」

それまで温和だった彼女の態度が瞬間的に氷点下に落ちた。

「どこで知ったのかい？」

「私はこの世界は二度目なのです。試しに言いましょか？
ウエストウッド村の山林の中に孤児と住む彼女の名は・・・。」

「分った、信じましょう。でもどうしてンナ事を私に告げるの？」

「テファを悲しませたくないからですよ。」

貴女は絶対に捕まらないと信じてドロをしてるでしょうが、世の中には絶対と

言う事はありません。悪い事してたら必ずお縄になります。

そして前世では私の妻だった貴女を不幸にしたくは無いです。」

「わ、私が妻だったって？アンタと・・・？」

「ハイ。信じられないでしょうが、事実です。」

この世界は不思議な事ですが、輪廻の繰り返しを行ってるみたいで
す。

その証拠をお見せしましょう。アクア姉さん・・・。」

小さい声で呼んだにも関わらず、アクアさんが参上です。

「呼んだか？我が盟友、タロウよ。」

「以前、私がこの世界に居たのは何年位前ですか？」

「もう数えるのもバカバかしい程、昔の事だ。」

人間の年月で言うと二千年は経過してるだろう。

お前が消えてからは、我は面白いヤツが居ず、ラグトリアン湖で引
き籠もっておった。」

「だ、そうですよ。マチルダさん」

マチルダは目の前に居る存在が、普通の霊とかモノでは無い事は理解出来てた。

だが、この存在が何なのか・・・。
理解出来ないで居た。

「あの・・・貴方様は・・・」

「我はお前達、単なるモノが言う、水の精霊なり。
我はタロウ・ヤマダとは古くからの盟友なり・・・」

マチルダはアゴが落ちそうになってたが、もう信じるしか無かった。
目の前の存在はまさに精霊そのものなのだから。

「失礼な事を質問してお許しください。

私はタロウ様の僕となるマチルダ・サウスゴードと言います。」

「フム・・・お前はタロウの僕となるのか？」

「ハイ。私はタロウ様に色々と助けて頂きました。

ご恩を返すには私の些細な人生を預けるしかありません。
どうか私の存在を認めてください。」

「良からう、お前を単なるモノからタロウの僕、マチルダとして認識しておこう。」

くれぐれもタロウを裏切るで無いぞ。」

「モチロンです。水の精霊様。」

「タロウ、このモノに我の秘薬を与えておく。
日々の暮らしの糧の足しにはなるであらう。」

「ありがとうございます。精霊様。
また遊びに行きますので、お待ちください。」

「また以前の如く、池のある家を早く持て。
我もそこに移動したいぞ。」

「もう少しお待ちくださいね。自宅を持ちましたら必ず池を作りますので。」

「楽しみに待つとしよう。では・・・。」

そう言われると水の精霊様はブシュッと消えてしまいました。
マチルダの手元には大量の水の秘薬が瓶に入ってます・・・。

「こ、こんな大量の秘薬なんて・・・。凄いお金になります。」

「良かったね。マチルダさん。
それを換金してテファの仕送りの足しにしてください。」

「数年は大丈夫ですよ。こんだけあれば。
ああ、もちろんアレは廃業します。」

「それが良いですよ。あ、部屋はココですよ。
じゃお休みなさい・・・。」

オラは部屋に入ろうとすると、マチルダさん、ガシッとオラの腕を

掴んで放しません。
どったの??

「タロウ様、私は貴方の僕となつたのですよ。
私のすべては貴方のモノ。何故離れようとするのですか・・・。」

ヤバ・・・。

ヤンデレ化が始まつてる。

前世の時もこの目になったら、逆らう事が出来なかったのら。
しかし、着いたその夜に女性を部屋に引き込むのはさすがに・・・。
それに腹が減りました。シクシク・・・。

そいから仕方ナシに彼女の言うがママに自分の部屋に入り・・・。

ゲフンゲフン・・・。

お子様には知らせたく無い事になりました。
腹がグーグー鳴ったので、手元のカバンに残つてたポテチを食べて
たら、
彼女に奪われたのは言うまでもありません。

・・・。。。。。

そうだ

オラはネ申様から魔法に關してはチートにして貰つたのら。
腹が減つたなら、食べ物魔法で何とかデキネか？
試して見ます。

「カップメンと箸、ついでにカセットコンロとボンベ出るー!」

出ましたよ。すべて・・・。

マチルダさんもビックラしてますが、食べ方が分らないので目を白黒させてるだけです。

オラは腹ペコタヌキなので、ヤカンに水を足し、コンロでお湯を沸かします。

そしてカップメンにお湯を足し・・・。

三分待つと・・・。

おおおお。ビバ、カップメン

マチルダにも食べ方を教え、一緒にズルズルと食べます。

彼女は初体験のカップメンに感激し、ンナ美味しいの初めて　と大騒ぎです。

腹が膨れたので寝ようとする・・・。

狼さんに食われてしまい明け方まで寝かして貰えませんでした。シクシク。

寝不足でも水魔法で何とか出来てしまう自分が悲しいっす。

翌日、彼女は肌がツヤツヤしてたのは言うまでもありません。

マチルダさんとキモ男さん（後書き）

ギリギリR15です。

マチルダさんはタロウの僕となりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8151z/>

キモ男 カンバ〜〜ック

2011年12月26日22時20分発行